

私は何故、セガンにかかわる研究書と翻訳書を著したか

学習院大学名誉教授 川口 幸宏

セガン研究書とは

『知的障害教育の開拓者セガン～孤立から社会化への探究』(新日本出版社、2010年)

『19世紀フランスにおける教育のための戦い セガン パリ・コミュニケーション』(幻戯書房、2014年)の
ことである。前者を『2010年著書』とし、後者を『2014年著書』とする。

また、セガン著書の翻訳書とは、

『草稿 知的障害教育論 白痴の衛生と教育』(幻戯書房、2016年)

のことで、翻訳書の原典はセガンが1843年に発表した論文(邦題)「白痴の衛生と教育」である。これを『1843年論文訳書』と称することとする。

2012年10月27、28日、フランス共和国ニエヴル県クラムシー・多目的ホールにおいて、『『特殊教育の黎明期に…』エドゥアール・セガン(1812-1880)の仕事』とのタイトルの下で、フランス、アメリカ、イタリア、日本から、そして地元住民たち、総計100名ほどの参加を得たシンポジウムが開かれた。主催はクラムシー市とクラムシー科学・芸術協会。地元クラムシーが生んだ傑人の一人エドゥアール・セガン生誕200年を記念する催しであった。私も参加し、主催者からの要請を受けて「日本におけるエドゥアール・セガン」とのタイトルで、1時間、報告をした。この詳細については『2014年著書』で触れているので、ここでは詳述しないことにする。

シンポジウムでは、セガンの諸業績にかかわる諸テーマが多角的に扱われていたが、セガンそのものを論じる報告はごくわずかしかなかった。それは、主催者の開催挨拶中の言葉「生誕の地クラムシーの地でもほとんど知られてこなかったセガン」やセガンの略歴を案内するシンポジウム案内文書の中のいくつかの誤り(誤認)が、象徴していよう。私は、教育学研究とりわけ近代教育史を主とした対象としているが、ありていに言えば、セガンほどその人生史の記述において誤りの多い人物と出会ったことが無い。ごく近年の研究成果の集成であるはずのシンポジウムでさえ、そういう事実があったのである。

それは、記述対象とされている人物の問題ではなく、記述者の「歴史」への迫り方の問題だと、言わざるを得ない。

その一つはクリティークという方法論の問題である。私が教育を歴史の中でとらえる研

究に踏み出した時、幾多の先輩研究者から、「先行研究を徹底して検証せよ」との指導を受けた。こと、セガンの事跡に関する先行研究は、非常にずさん、の一言に尽きる。セガンの事跡についての「権威ある報告」として認められているのが、(1) アメリカの教育学者タブロットの博士論文(1863年)、(2) セガン葬儀の際のアメリカの友人たちによる弔辞(1880年)、(3) フランスの医学博士で「セガンのフランスにおける復権」に貢献したといわれるブルヌヴィルによる1800年ごろの諸論稿、そして(4) これはわが国独自の問題であるが、中野善達などによるセガン著書・論文の邦訳と研究的解説、などである。少なくとも我が国のセガン研究においては、これらは積極的に引用・活用されている。が、しかし、クリティークはされていない。従って、史実誤認や虚偽記述を多く生み出している。

その二つは、クリティークに大きくかかわる事柄であるが、史料発掘がほとんどなされていない。いわば、セガンは、各種研究論文の中で、実態〔史料〕の無い幻影が実在人物として描かれ続けてきたわけである。私は、とりわけ、フランス時代(1812～1850)の半生史を探究したが、先行する研究者は、セガン自身が著書・論文の中で埋め込んでいる自身の生育史記述さえ尊重しようとはしてこなかった。それは直ちに、生育を裏付ける史資料の発掘が無かった、ということになる。このことも、一般の歴史研究の初歩的方法さえ無頓着だった、と言わざるを得ないのである。

その三つは、以上のことが必然的に導く、推論記述が大いに目に付く、ということである。たとえば、セガンは、どのように名称記述されるべきか。まずは戸籍名、続いて自称名、さらには特別に公的な機関から賦与された名誉名などが考えられるが、どの名前を使って記述するか、記述者の対象人物に寄せる思想というか哲学というか、観念が表される。

セガンのフランス戸籍名が我が日本に知られるようになったのは2004年、清水寛編著『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育実践』(全4巻、日本図書センター)によってである。これにはOnésime-Édouard Séguinとある。アメリカでの公文書(結婚証明書、死亡届)が公開されたのは、先に触れた2012年のシンポジウムにおいてである。結婚証明書はEdouard Seguin、死亡証明書はEdouard O. Seguinである。このきわめて近年の情報是一般に知られてはいないから、セガンを記述する際には、これらの公文書によることが無く、その記述当時に、何らかの情報によって知られているところを使用するのは当然

のことである。

私の調査で、フランス公文書関係では、学籍簿、徴兵検査簿、1830年革命褒賞者名簿に Onésime-Édouard Séguin が使用されているが、教育施設設置願書関係（1839年）、救済院総評議会審議録（1842、43年）には Edouard Séguin が使用されている。そしてセガン自身はといえば、E. Seguin、Edouard Séguin、Edward Seguin を使用している。

こうしてみれば、Edouard Séguin をコアとして研究的記述するのが正道だろう。だが、事典類に Edouard Onesimus Seguin が使用されている（例えば、精神薄弱問題史研究会編『人物でつづる障害者教育史（世界編）』日本文化社、1988年。執筆者は清水寛）。これはセガン論史にとっては大きな影響を与える問題だろう。公文書でも使用されず当人も使用していない名前（綴り）が正道とされている現実をここに見ることができる。

もっとも基本的な事項だけに限って以上、綴った。誰かが訂正すればいいことなのだろうが、誰も訂正する隙間など無く、「ガセネタ」がどんどん伝搬している、というのがセガンをめぐる研究的状況であった。それでも、私には関係ない、といえば済んだであろう。しかし、どうしてもそのままにしておくことができない状況と直面することになる。2005年7月2日に、学習院大学文学部大会議室を会場として開かれた、「清水寛先生の『セガン 知的障害教育・福祉の源流—研究と大学教育の実践』出版と日本社会事業史学会文献資料賞受賞をお祝いする会」を主宰する一人として参加、基調的報告をしたこと(タイトル「今、セガンについて、分かりつつあること」)、ならびに、その場で清水寛発議で「日本セガン研究会」が結成され私に事務局を預けられたこと、2012年に開催されるセガン生誕200周年のシンポジウムに参加し報告する、という課題を清水寛から与えられたのである。

煩悶と逡巡とを繰り返しながら、上記した「ガセネタ」（言葉は悪いが私にはきわめて実感的な表現である）類を葬り去るための実証性を得、新たなセガン像を構築すべく、渡仏を繰り返し、古文書館、図書館等の公的機関詣でによって史料調査を行い、古書店で史料の発掘を試みた。その他、セガンの出自を明らかにすべく家系調査にも挑戦した。2009年度は職場から長期サバティカルの機会を与えられ、思い切ったフィールドワークに取り組むことができた。このことで、おおよそ、次のことがセガンのフランス時代の事跡とし

て描くことができる確信を持った。

1. 出生、生育、学歴などの半生史
2. 社会活動・運動史
3. 知的障害教育開拓史

こうしたことを、私の研究的支援者・支持者の一人に話ししたところ、「私はどうしても先生の本を出したい」とぼつんと漏らされた。私は、長年—おおよそ 1990 年から—、自分の研究を書籍や学会発表の形で世に問うという行為に対しては後ろ向きの生活を続けていたが、この言葉は、いい加減に目を冷ましなさい、という叱咤激励に聞こえ、出版を意識して綴りはじめた。テーマは「孤立から社会化へ」。セガンは素材であるけれどメインテーマになるという扱いはない。これがこの時点での私の「セガン研究」の到達だった。そして『2010 年著書』が誕生した。ただし、公刊書籍のタイトルは、あくまでもセガンがメイン。これは出版社から出版事情に配慮せよとの要請を受けたことにある。

私の来歴を知る多くのかつての仲間たちは、目を丸くして驚いたようだ。そして「何でお前がセガン研究なのだ、生活綴方はどうした！」とか、「今さらセガンをやる意義などあるのか！」とか、さらには「お前の書いたもの、誰が読むのか」とかの厳しい批判が寄せられた。知的障害教育を担っているある人などは「私の方が重い子どもを教えている」（セガンなど、たいしたことはない、つまりお前の研究は何も現代に寄与するものはない）と揶揄的な言葉を残した。

肯定的評価者であっても、第 1 章〔生育史〕そして第 2 章（社会活動史）によってセガン像が詳しくなった、ということを描き出す程度であった。私の知る限り、この研究対象ほど研究的に手抜きされた存在はない。そのことによって時代論さえ明らかにならなかった。このことを、これまでのセガン研究者に自己批判してほしかった。そのテーマこそ第 3 章（知的障害教育開拓史）に込めたつもりだったのだ。セガンが共和主義者としての足跡をしっかりと残していることの判明には大きく賛辞を送るくせに、セガンが当時、白痴の「治療」と称して医学実験の対象としていた医学者たちと闘ったことの読み取りを、第 3 章記述からはしていない。それまでの研究では、セガンは、フランス医学界から高く評価された、政府から懲罰されて（招かれて）「白痴教育」に着手した、という定説であったのだから

ら、この第3章記述は、大きな歴史評価転換の提言となっているにもかかわらず、だ。

もちろん私のこの研究に対する姿勢や研究の到達に対して、積極的肯定的に捉えて下さる方々もいる。中でも、私の大学院生の頃から一人前の教育学研究者として育つことを期待し、厳しく暖かい批判的関係を結んで下さった志摩陽伍先生は、『2010年著書』に対し、若い頃の川口の存在が本物であったことを知った、言わば、川口はいまだ健在なり、とばかりに、この書の研究批評会を催して下さった。また、セガン研究の世界からも「自分たちがやらなかったこと、やらなかったことをやってのけた、生活綴方研究者だからこそだ。国際的に評価されよう。」との声が、学会誌書評を通して表出された。

一方ではほとんど理解されない状況、一方では思いもよらないお褒めを頂く状況は、私に新たな挑戦を決意させてくれた。それは「フランス 19 世紀近代論」として、社会が「自立する課題」を具体化し挑戦する実像を描きたい、そこに「セガン」を一つの柱として位置づけて論じたい、ということである。ついでながら、もう一つの柱には「パリ・コミュニケーション」(1871年)を据えた。「自立」には「破壊と創造」とを伴う。何を破壊するのか、何を創造するのか。それぞれが、しかも、19世紀の本質を語るものでなければならない。

セガンに関しては、『2010年著書』の第3章を浮き上がらせること(セガン研究者たちによってスルーされた課題)。出版費用の関係上、紙幅はあまり取ることができないが、原史料をていねいに提示する(翻訳も含め)。そして、後学の者がもしいるとするならば、その人たちの研究の手引きとなるよう原史料文献一覧を供する。「先生の本をどうしても出したい」というかの人が、幸いなことに、幻戯書房の編集者となっていた。原稿を渡し、最終点検のためにフランスに再調査に出かけた。2013年秋のことである一。

こうして『2014年著書』が誕生した。「フランス教育学会」紀要第27号(2015年)上の「図書紹介」で、今後セガン研究を行うには、「筆者の指摘について、自ら検証する作業を避けずませるわけにはいくまい」と述べられた(坂倉裕治筆による)。また、全国障害者問題研究会『障害者問題研究』誌では『2010年著書』『2014年著書』とが併せて書評された。(この小論の末尾に添付してある。)

私のこれまでのセガン研究の特徴は、人生舞台を具体化することであった。どこで生ま

れ、どこで育ち、どこで学び、どこで生活し、どこで何と闘いどうなったか、どこで誰と結びあったか、などなど。白痴教育の道も、どこで、どのようにして、を主題とした。そして、これらそれぞれについて、先行研究者の記述が、「ガセネタ」であったことを事実上暴露した。

だから、セガンが、どんな教育観を持ち、どんな教育方法を採り入れ、どんな子ども観を持っていたか、ということは興味の外にあった。先行研究者の論じることの大枠を自分自身のセガン観としていた。正直に言えば、「知的障害児教育の専門領域」に入り込むことを避けた、ということだろう。

2014年3月末で定年退職のため、職場から離れ、時間にも大きなゆとりが出てきたこともあり、セガンの教育論の大枠だけでも自分の頭で知っておこうと、フランス王立科学アカデミーの部門機関誌『法医学と公衆衛生』1843年上半期号に掲載された「白痴の衛生と教育」を紐解いた。この論文はその存在が指摘されてはいたが、実物は未発掘であった。この論文こそ、セガンの「白痴教育」体系の原景なのである。この論文は単行本化されており、幸いなことに、中野善達によって訳出されている。原典とつけ合わせて読むことができるから作業はスムーズであるはずである……。

この中野訳本によって、フランス語が理解できないセガン研究者たちは、フランス時代のセガンの教育論を「理解した」のだ。かつて研究を志し読んだ平凡社の『ペスタロッチ全集』（全12巻）の訳文は、直訳調であるために実に読むのに難渋苦渋させられたが、中野セガン訳書は平易な日本語調だがさっぱり理解できない箇所が続々と出てくる。何でこんなことになっているんだ？そういえば、セガンの1866年著書の訳書も訳文を理解するのに苦労させられたっけ。セガンって、そんなに軽い人物だと扱われたってことか？「知的障害教育の開拓者」であり、ローマ法王からその業績故「白痴の使徒」との称号を贈られた、というのに、そして、マリア・モンテッソリーやドクロリーらの教育創造の大きな礎にされたというのに、我が日本のセガンの扱いは、なんということだ！

こうして、どうしても自分なりの訳文を作らざるを得ない事態に、自分を追い込んでいくことになった。

これらの作業の中で、セガンの使用する概念がセガン独自のものである、という、いつ

てみればあたりまえのことに気づくことになる。

例を挙げよう。セガンは英語論文を書いている。彼が言うところでは、あまり英語は達者でない、そうだ。そのことをふーんと聞き置くだけで、彼の英語論文を私たちが理解している英語体系に合わせて読むとしたら、どうなるだろう。詳しくは、『セガン 1843 年論文訳書』に綴った解説に譲るが、彼はマルクス主義に接近していった大なる戦いの人であり、無償教育制度の実際を先取りした人となる、などとされてきた。英語原典にセガンが **free education** と綴っていることが、(我が国における) これまでのセガン研究者のこうした理解を産ましめてきた。「自由 (な) 教育」という理解など入る余地がない扱いをされているわけである。これなどは、文章誤訳という中野善達のセガン論をすでに超えている問題であり、セガンが制度的無償教育論者として理解されたわけである。

また、セガンはサン・シモン主義者だったと、誰もが説明する。どういう意味でそうだったのかの記述は、あまり深くはない。サン・シモン家族の一員に迎え入れられたこと、教育改革の視点基盤としての「サン・シモン学派」を担っていたこと、という程度である。あとは、セガン研究者の「解釈」によってサン・シモン主義者、セガン像が築かれ、セガンの文言が「理解」される。上記した **free education** の理解と解釈はその一例だ。

しかし、セガンの「白痴教育」開拓の実際・具体との関連で、セガンの文言が読み取られることが無かった。ありていに言えば、セガンが「サン・シモン教」の敬虔な信者であったこと、それは教会を持たない・特定教会に所属しない一人の宗教者(平信徒)としての生涯を貫いた信仰心の持ち主であったこと、そのことが、1843 年の論文の随所に散りばめられている、ということの理解にまで及んでいない先行研究者の読解ぶりである。

「原文に忠実で、セガンの記述を日本語で読み取ることができる」(私の論文に対する藤井力夫の評) ようなセガン翻訳書が求められていることは間違いない。それによって、ようやく「ここからセガン研究が出発する」(清水寛) のだろう。そのようなセガン研究の展望に少しでも応えることができるようにと、『セガン 1843 年論文訳書』の原稿を出版社に渡したのは 2015 年秋であった。

綴り切れない課題が一つある。セガンの人生哲学の基本を支えたであろう敬虔なクリスチャン・セガン像である。当然それは、彼の「白痴教育」を強く支えていたであろう。

(書評)

川口幸宏著

『知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究』新日本出版社 2010年

『一九世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コミューン』幻戯書房 2014年

評者 藤井力夫¹

戦後でみても、私たちの先人は、「この子らを世の光に」(糸賀一雄)とか、「道は遠けれど」(近藤益雄)、あるいは「胸ふつつつ」(青木達雄)、「逆風に帆をあげて」(与謝の海養護学校)と謳ってきた。本当のところを実現するためにこころの内から滲み出た戦いのうた、そう解することができる。誰もが落ちこぼれなくということを追求するほどに、形式的に済まそうとする壁に突き当たる。どう覚悟を決めるべきか悩んでいる人も多いことと思う。ここに紹介する二著作は、こうした悩みを、近代市民社会の成立時に立ち戻って考えることができるという機会を提供してくれる。戦前日本における生活綴方教育運動の発掘調査研究に携わってきた著者だからできた第一級の研究である。日本でのそれを、近代公教育の発祥の地、フランスで実施し、パリ・コミューン下での世俗性教育に向けての戦いや、知的障害児教育の開拓者、オネジム＝エデュアル・セガン(Onésime-Édouard Séguin, 1812-1880)の苦闘を浮き彫りにしたのであった。2012年10月、フランス・クラムシーで開催されたセガン生誕200年シンポジウムを鑑みても、著者における研究の到達段階は、最先端に行くものと推察される。二著の内、2010年著作については、別のところで既述した(『フランス教育学会紀要』23号、121-124、2011年)。ここでは、二著作における優位性について、学んだところをいくつか記してみたい。

1)「**当事史料と直接対面することによって、当時の実像を知ろうとする立場を強固に持った**」。これが著者あとがきにある基本姿勢で、セガンの生地、ヨンヌ県立古文書館はじめ、コレージュ学籍簿、国立図書館、パリ医療福祉古文書館、パリ市歴史博物館などを訪ね、第一級の当事諸史料を発掘させた。叙述は章立てごとに緻密で淀みない。各部巻末には、

¹ ふじい りきお

元北海道教育大学教授、元札幌三和福祉会三和通所施設長

例証ともいえる原資料が翻訳付記されている。読み手には原資料で再構成できる。

a) 2010年著作：知的障害教育の開拓者セガン—孤立から社会化への探究 翻訳資料、子息の教育についてのO氏への助言（1839）。

b) 2014年著作：19世紀フランスにおける教育のための戦い—セガン、パリ・コミューン。／第一部 白痴教育教師の誕生 原資料翻訳、白痴たちの治療と訓練の起源（1856）。／第二部 パリ・コミューンと近代教育の構想 原資料翻訳、パリ・コミューン下の子どもたちの状況 裁判調査資料より

2) 「**創意くふうのある教育活動の発生**」 これは、著者が1980年の著作『生活綴方研究』（白石書店）のなかで「教育実践の歴史性」について言及した一節である。創意あるところを跡付けるとすれば「当事史料」が重要となる。さらなる発展、それがパリ・コミューンやセガンの研究へと向かわせ、「当事史料」を発掘させた。1986年の著作『教師像の探究 子どもと生きる教師像の創造』（教育史料出版会）とともに読んでいただくことをお勧めしたい。「特別支援における教師像の探求」．どう持つか。考えるところを胸に歴史と対話する。さすれば学ぶところが多いに違いない。

3) 「**孤立**」から「**社会化**」へ。これは2010年著作の副題である。近代市民社会における障害児教育の開始をここに見いだしたことが、著者をして明解に諸関係を分析、叙述させたものと考えられる。アヴェロン野生児、ヴィクトールの教育可能性をめぐって、イタール(J.-M.-G. Itard)はピネル(P. Pinel)の見解に与せず、救済院ではなく、聾啞学校での実践を試みた。後継のエスキロール(E. Esquirol)は、1818年、知的障害を状態像と理解し、孤立状態にあると定義する。生来的な「孤立」は外界に立ち向かうことなく、市民として発達する可能性はないと理解する。しかし近代市民社会のなかでの「孤立」は、立ち向かう機会が保障されてのことで、教育なくして不可能とはいえない。乳幼児における可能性は、値踏みできるほど安価ではない。セガンは、1838年、イタールの導きのもとにこの課題に挑戦したのであった。

4) どのように挑戦していったのか、セガン自身による整理が、2014年版・第一部・原資料翻訳（1856年6月）として付記されている。アメリカに渡って6年、最初の実践から17年目の覚え書きである。訳文は、原文に忠実で、セガンの記述を日本語で読み取ることが

できる。残念ながらこれまでのセガン翻訳本にはなかったこと。なお、本論文は、コネチカット州・知的障害者実態調査委員会報告（1856年5月）にも掲載され、アメリカにおける知的障害児学校の開設運動に貢献した。1850年代以前と以降、そして現在、三面から翻訳文の行間を味わうことができる。

5) セガンは上記論文で、**当初たてた「哲学的原理」をとにかく実践的に削ぎ落とした**と記している。では、元になった哲学的原理とは何だったのか。「孤立」を抜け出す鍵概念でもあるので補足しておきたい。それは、対象児における「自我」と「非我」の関係で、当初は未熟。目で捉えたものが「非我」で、それをどうしたいのかが「自我」。面白そうだなとか、何だろうと思った時にはじめて「非我」となり、どうしたいのかで「自我」が育つとする。この意味で模倣が大事であり、対峙できる身体軸が形成されなければならないとする。食欲の赴くままにしか行動できない子どもたち。日常の生活場面でどうしたいのか、行為を組織する実践こそが課題で、患者を何百人も診る仕事、医師が重要なのではない。教師こそが求められるとする。

6) 青年セガンにおいて、**知的障害児教育に携わる必然性**はどのように準備されていたのか。著者による実地踏査はこれへの接近を可能にさせた。1830年七月革命時、セガンは18歳で、王立特級コレージュ・サン＝ルイの数学特別進学クラスに在籍。成績も優秀。革命に功労があったとして、同年12月3日勅令により褒賞を授与。理数系の国家リーダー養成校の準備課程に在籍し、社会の矛盾には、演説でもって立ち上がることができる人物。そんな一面が調査されている。その後の経緯含め、著書を読みたい。他方、ユゴー（Victor Hugo）は、この時28歳、市街戦に参加することはなかったが、同年9月から『ノートル＝ダム・ド・パリ』の執筆に集中したとのことである。興味深い。

7) ここで、挿絵を二つ。いずれもユゴー著。一つは『レ・ミゼラブル』第三部・マリウスの口絵。他は、『ノートル＝ダム・ド・パリ』第4編1の挿絵。前者は、パリにおける捨子記述の冒頭部。七月革命を描いたドラクロアの「民衆を率いる自由の女神」中央部を使用。



右側の銃を持っている少年が「ガヴロッシュ」で、捨子。浮浪児の代表。後者は、作中・1467年のある朝、寺院玄関前に捨てられた乳児を教会婦人部の人たちが見ている図。司教補佐・フロロにより「鐘突き」として養育。拾われた日にちなみ「カジモド」（復活節第二主日）と命名。ところで、1841年、セガンが救済院で対象とした知的障害児11名の内、少なくとも6名は孤児や捨子。「ガヴロッシュ」や「カジモド」には、その奥に、知的障害の子どもたちが存在していたのである。捨子の内、3分の2は、生後1ヶ月以内に死亡。知的障害児とは生命力を持った子どもということになる。

8)「カジモドの眼」。文芸作品における「非我」の抽出。著者は、ユゴーが8歳前後の時、住んでいた近くの庭園で、ゲラン夫人に連れられたアヴェロンのヴィクトールと遭遇した可能性を推測し、その例証を試みている。前記の「カジモド」もその一例と言えよう。脊柱彎曲で、ゆがんだ顔の一つ目、聴覚も鐘音で障害。そんな彼が何を見、どう思い描いているのか。「カジモドの眼」を通じ、彼の「非我」を描出、文学作品とした。セガンが、託された子どもを前に、彼の「非我」を想定し行為を引き出す場面を設定しようとしたとしても、何の飛躍もない。1820年代、両眼視機能の解剖学が進み、後に斜視手術も準備。盲学校では生徒ブライユ（Louis Braille）が点字を開発。6点構成による蝕読方略を完成。子どもたちの眼が、何を見つけどう感じているのか。「非我」への想像が障害児教育創始の出発点であった。

9) 救済院での上司、医師ヴォアザン（Félix Voisin）との対立は、てんかん児をめぐる問題だけではない。職業教育をも視野に入れたセガンにおける条件整備への要求が背景にあったものと考えられる。著者の実地調査による大発見。1848年二月革命時の「労働者権利クラブ」のアピールは、労働を通じての自己実現という課題も視野に入れられている。同年11月4日共和国憲法第13条では、無償義務教育と職業教育を結びつけ、労働を通じての自己実現も目指す規定となっている。これは社会権規定の最初の一つで、働けない場合は家族が養うことを前提に、救済される権利があるとする。セガンの取り組みが社会権規定に貢献していたことを示す一例であろう。ただし、整備の任にあった人たちや、推進すべきヴォアザンたち医学界は、「教育」を目指すよりも、まずは救済さえできればよいとする立場であった。セガンからすれば、救済という名の障害の「固疾」が進行するのであった。

10) 最後に、2014年著作・第二部について。前記・「カジモド」は中世後期の作中人物であった。彼はフロロにより生命を得たが、教会の中での閉じられた生活であった。近代公教育における「世俗性」は、摂理を離れ、市民として労働者としての教養を形成することを原則とする。ところが、無償制や義務制に比べ後回しで、1850年ファロウ法 (Loi Falloux) でも、「教育の自由」の名のもと宗教者の教育介入が合理化されるのであった。これに対し、ユゴーは立法議会で反対演説する。児童労働に加え、科学から遠ざけられている子どもたちの悲惨を憂え、「教育への権利」を主張する。権力の中枢にいたティエール (Adolphe Thiers) との確執も興味深い。その後どのように展開され、1871年のパリ・コミューンではどのような人たちが立ち上がったのか、その実相が解明される。著書を読みたい。巻末の「研究のための史料素描」、原資料翻訳、立ち上がった浮浪児たちの「裁判記録」は、これまでの理解を書き改めてくれるであろう。

(出典：全国障害者問題研究会『障害者問題研究』第43巻第4号、2016年2月25日)

~~~~~

《補》

2012年10月末に行われたセガン生誕200周年記念シンポジウムでの評価：

「ムッシュ川口によって新しく確信できるセガンの数ページが開かれた。」

「セガンがオセールの祖母の家に寄留していたこと、これは当時の里子 - 里親システムとかわつての考察と史料発掘から間違いのないことだと評価できる。その家も特定されている。オセールのコレージュでの学びの姿を今一度検証しなおす必要もあるかもしれない。」

「セガンが共和主義者であったと言われてきたが確証出来る史料はこれまでなかった。ムッシュ川口は労働者の権利クラブのポスターを発掘している。これによってセガンが共和主義者であったと確かに評価できる」

「このポスターがセガンの白痴教育の目指す道を示しているとムッシュは評価しているが、肯定的に検証する必要ができた。」